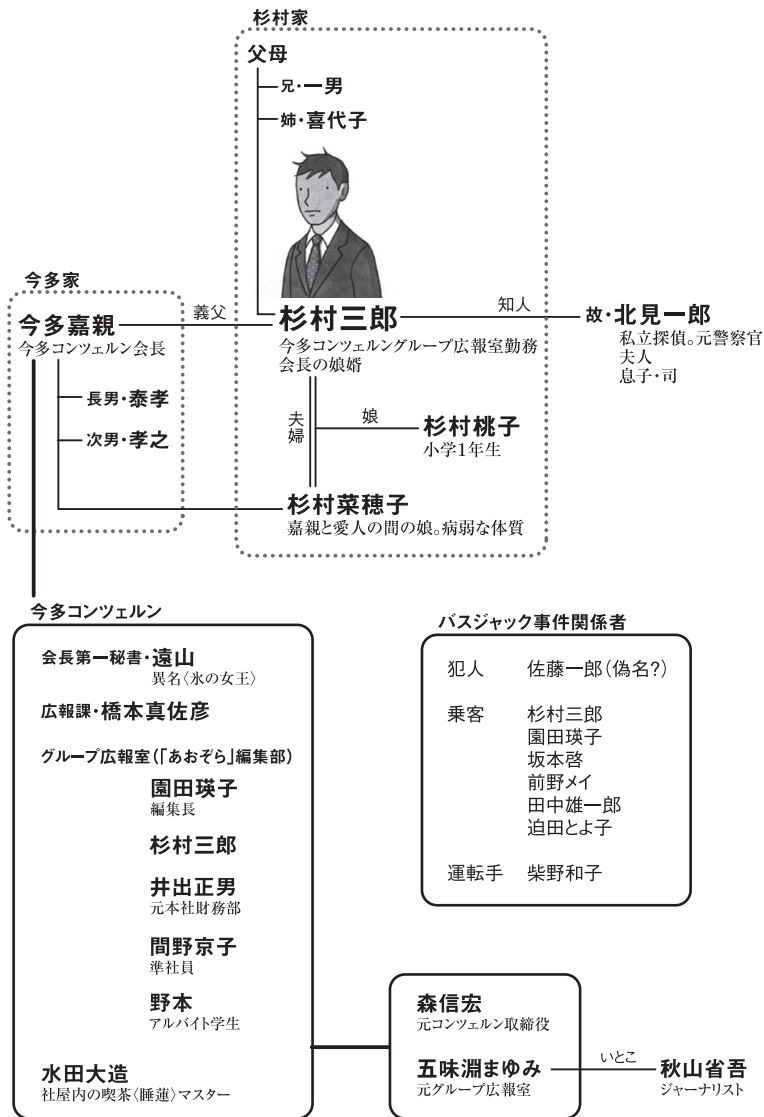


ペテロの葬列

装幀 緒方修一
装画 杉田比呂美

杉村三郎を巡る人物関係図



プロローグ

後になって、誰が誰だったか思い出しきれないほど多くの人びとから、私は尋ねられた。あのとき何を考えていたか、と。あるいは、何か考えることができたかと。

いつも、私はこう答えた。「よく覚えていません」

問われて答える機会が重なるにつれて——私の答えを聞いてうなずき、同情し、いたわ労つてくれる人びとの顔を、彼ら自身も気づかぬほど素早くよぎる好奇と猜疑の色を目にすることが重なるにつれて、私は狡賢ずるがしこくなり、ちよつと間を置いてこう言い足すようになった。

「言葉の綾よこしまじゃなく、頭が真っ白になってしまつてね。何か考えていたのかもしれませんが、今では思い出せないんです」

そして、私もまた彼らと一緒にうなずいてみせるようになった。そうすることで、彼らの顔をよぎつた好奇と猜疑の色が、すぐには戻つてこないようにすることができると学んだからである。共に、心地よい安堵を分け合うことができるようになったからである。

あのとき何を考えていたか。

事態が收拾されたばかりのころ、私は、私に向かつてそう問いかけ、答えを引き出す資格がある人物は、一人しかいないと思つていた。妻である。七歳の娘は年齢制限でひつかかるし、そもそも事の詳細を知らない。こんなケースでは、知らせないことが親の義務でもある。

あのとき何を考えていたか。

案に相違して、妻は私にその問いを投げなかった。彼女を悩ませていたのは、私には思いがけない

疑問だった。

「あなたばかり、どうしてこんな目に遭うのかしら」

私は、その場で思いついたことを言った。

「僕は飛び抜けて幸運な人間だから、神様が、たまにはバランス調整をしないと不公平だと思っやないかな」

妻は微笑した。何となく点けっぱなしにしていた深夜のテレビに映った古いB級映画のなかで、気の利いた台詞を聞いた——というくらいの微笑みだった。

「そんな上手なことを言うなんて、あなたらしくない感じがする」

妻は少しも納得していなかったし、同時に、このことではどれほどしつこく私を問い詰めても、彼女の求める答えは返ってこないと諦めているようでもあった。

「もう忘れようよ」と、私は言った。「事件は片付いたんだし、みんな無事だった」

そうねと、彼女はうなずいた。瞳は少しもうなずいていなかった。

「君はあのとき何を考えていたか」と私に問う資格を持つ人物は、実はもう一人いた。私はその人物を除外していたというより、畏れと遠慮と後ろめたさに追われて、その人物から逃げていた。

妻の父、私の義父の今多嘉親である。今多コンツェルンという一大グループ企業を率いる会長で、財界の要人で、今年八十二歳になるが、若き日に〈猛禽〉と称された鋭い眼光と、その眼力の源泉である頭脳の切れにはいささかの衰えもない。私の妻の菜穂子は、彼の外腹の娘だ。

菜穂子はいかなる形でも今多グループの経営に関わってはいないし、将来も関わる可能性はない。会長の娘という権威は身にまとも、権力は持たない立場だ。一方、菜穂子の夫である私は、会長の婿という権威さえ身につけていない。ただ結婚の条件として、そのころ勤めていた小さな出版社を辞め、今多コンツェルンの一員となり、会長室直属のグループ広報室で社内報の記者兼編集者として

働くことを提示され、私はその条件を呑んだ。結果、義父は私の雲上人のような上司になり、私は今多コンツェルンの末端の社員となった。だから今多嘉親には、身内としても上司としても、私に質問する資格があった。

「ああいうとき、人間は何か考えられるものだろうかね」

正確には、義父は私にそう尋ねたのだった。

「申し訳ありません」と、私は答えた。

義父はちよつと顎を引いた。

「誰か君に謝れと言ったか」

「いえ、ですが……」

「そんなにあわてて謝るところを見ると、さては君、あのバスのなかで、菜穂子と桃子以外の女の顔でも思い浮かべていたんだな」

桃子は私と妻の一人娘の名前である。

私がB級映画の台詞のようなことを言おうと狼狽ろうたえているうちに、義父は笑った。

「冗談だよ」

そのとき我々は義父の私邸の書齋で、机を挟んで向き合っていた。このやりとりを聞いているのは、書架を埋め尽くした大量の本と、書架の隙間すきまに飾られている数点の美術品だけである。

「実際、何か考えられるものだったか？ 君には失礼かもしれないが、私は純粋に好奇心で訊いているんだ」

義父の目には、確かに知的好奇心の発露を示す光が宿っていた。

「会長はいかがですか」と、私は問い返した。「これまでの人生で、命の危険にさらされたことがありません。そんなとき、何かお考えになりましたか」

義父の目が、光を宿したまま瞬きをした。

「そりゃまあ、あつたさ。我々は戦争世代だからな」

第二次世界大戦の終盤、義父は徴兵されて従軍している。だがこれまで、どんな機会にどんな場で尋ねられても、それについて詳しく話したことがない。自分には語るほどの経験がない、というのが本人の弁だ。

「しかし、君が巻き込まれたような事件と、戦争とは比較の対象にならないよ。だからこそ好奇心がうずくんだ」

私は義父の顔から目をそらし、義父の背後にある、見事な革装の世界文学全集の背表紙へと視線を投げた。

「会長は以前、私にこうおっしゃったことがあります。殺人行為は、人がなし得る他者に対する極北の権力行使だ」と

二年ほど前、私たちグループ広報室のメンバーが被害を受けたある事件の際に、義父は怒りを隠さずそう述懐したのである。

「ああ、言ったな」

「そんなことをするのは、その者が飢えているからだ。その飢えが本人の魂を食い破ってしまわないように餌を与えなくてはならない。だから他人を餌食にするのだ、と」

義父は、机に肘をつけて指先を合わせた。ここではよくこのポーズをとる。すると私は、神父に向き合う信者のような心地になる。

「先日の事件でも、私はそうした権力行使の対象にされたことになるわけですが」
拳銃を突きつけられ、言うとおりにしなかったら射殺すると脅されたのだから。

「何故か、あの犯人からは、会長がおっしゃったような〈飢え〉を感じなかったのです」

義父は私を見つめている。

「だから怖ろしくなかったというわけではありません。私も、一緒に人質になった人たちも怯えていました。犯人が本気でなかったとは思いません」

「現に撃ったんだからな」と義父は言った。

「はう」

「君には、あの結末が予見できたか」

かなり長いこと世界文学全集を見据えて考えてから、私はゆっくりとかぶりを振った。それからやつと、義父の顔を見た。

「事態がどう転がるか、まるで予想ができませんでした。しかし、あの結果になったときには、それが当然のように感じられました」

落ち着くところに落ち着いた、と。

「目の前で起こった出来事ですが、あまりにも呆気あきげなかった。瞬きする間に終わっていたような気がします」

発生から収拾まで三時間余りの事件だった。国内で発生したバスジャック事件のなかでは、最短で解決した事例だという。

「子供の自転車を……見ていました」

訝いぶかしげな義父に、私は微笑した。

「バスの駐まっていた空き地の隅に、乗り捨てられていたんです。グリップとサドルが赤い、小さな自転車でした。乗降ドアのガラス越しに、私にはよく見えました」

今にも、ふいと持ち主の少年か少女が現れて、赤いグリップに手をかけ、スタンドを蹴ってサドルにまたがりそうな気がして、たまらなかった。

「お義父さん」と、私は言った。「お尋ねを受けて、やっとわかりました」
義父は黙ったまま、わずかに身を乗り出した。告解を促す神父のように。

「私はそのとき、何も考えられませんでした。だから今になって、考えずにいられません」
あの場にあるべきだった〈飢え〉が、どこかに残っているのではないかと。

1

九月も三週目に入り、残暑もようやく薄れ始めたころだった。私と編集長が向かおうとしているのは海辺の家で、インタビュ어가長引いて帰りが日暮れ過ぎになると、背中を押す潮風で思いのほか身体が冷えることを、二人とも学習していた。これで通算五度目の、そして最後の訪問になる予定だったから。

大判のトートバッグのなかに薄手のカーディガンを丸めて突っ込んで、園田^{そのだ}英子^{えいこ}編集長は、私に言った。

「ねえ、予備のICレコーダーを持ってくれた？ こないだみたいにならぬうちに、途中でいっばいになっちゃったら困るんだから」

我らがグループ広報誌「あおぞら」の編集部は、社員三名に準社員一名、アルバイト一名のこぢんまりした所帯だ。高層インテリジェント・ビルである本社の裏にひっそりと佇む、三階建ての別館の三階にある。

ここは別天地であると同時に孤島だった。それも流人^{るど}の孤島である。

菜穂子と結婚して十年、つまり今多コンツェルンの末端社員の一人となって十年以上が経つ私だけれど、未だにこの膨大なグループ企業の全貌をつかむことができないでいる。義父は、自身の父親から受け継いだバレット輸送を主とする小さな運送会社を、一代でここまで巨大で複雑な企業体へと育てあげた。今も「本家」は物流会社だが、それはいわば大木の幹の部分であり、枝葉には多種多様な傘下の会社がかくついている。

義父はかねがね、そんな複合企業体に働く数多の従業員たちの同床異夢——コミュニケーション不足が気になっていたらしい。そこであるとき、もう十数年前になるが、グループ全体に行き渡る横断的な社内報を発行しようと思いついた。それが「あおぞら」創刊のきっかけだ。だから発行人は今多嘉親その人である。

園田瑛子は、創刊時からの編集長だ。会長直々の抜擢だった。大学を出て新卒で今多コンツェルンに就職し、事務職として様々な部署を渡り歩き、傘下の会社に向した経験も豊富なベテラン女子社員——いわゆるお局様の彼女が、その社歴のどの時点で会長の目にとまったのか、私も正確なことは知らない。

「あたしは本社の社内報編集部にいたことがあるからね。そのときの書きっぷりがお気に召したんじゃないの」

というのが本人の弁で、実際それ以上の理由はないのかもしれない。ただ、彼女の処遇に謎めいた所以を感じる向きは多く、だから園田瑛子が会長の愛人（もしくは元愛人）だという噂は根強い。この真偽を、園田女史曰く〈会長の嬖殿〉である私に問い質すような猛者は見あたらず、仮に問われたとしても、私にもわからない。ただ、菜穂子はこの噂を笑い飛ばしている。

「園田さんは、今多の奥様とも、うちの母ともタイプが違い過ぎるもの」

ほかでもない自分の母親が今多嘉親の愛人だったことがある娘の言うことだ。私は手放しで信用する。そして菜穂子が、自分の父親の正妻であり、歳の離れた二人の兄たちの母親でもある亡き女性を指して〈今多の奥様〉と呼ぶときの目の色が、

「あたしは会長の愛人なんかじゃないわよ」

と、苦笑いしながら言うときの園田瑛子の目の色と驚くほどよく似ていることも、私の信用を裏書きしてくれる。

ともあれグループ広報室はそういう場所だ。だからここに配属される社員たちは、どんな意味合いであれ前線から外された者たちばかりである。すなわち流人だ。彼または彼女がルーキーであるかポートルであるかによって、島流しの時期と理由が異なるだけだ。

園田瑛子は、その島の長である。必然的に異動が多くなるこの広報室内にどっかりと腰を据え、多くの流人を受け入れ、見送ってきた。受け入れた流人のなかでも、扱いにくい筆頭がこの私だと思われ、彼女がそんな私を上手にこき使い、しばしば〈会長の婿殿〈今多家の使い走り〉〉とからかって、私と周囲とのあいだに溜まるガスを抜くことまで周到にやっつけてのける。賢い人なのだ。私が面と向かって、実は私は貴女をちよびり尊敬しているんですよと言ったら、彼女はどんな顔をするだろう。

つまり私は、園田瑛子の編集長ぶりに、まったく不満がないのだ。ただ、彼女の機械オンチぶりだけは、少々持て余すことがある。

「この前、ICレコーダーが止まったのは、いっぱいになったからじゃありませんよ。電池が切れたんです」

それに予備の録音機器なら、言われるまでもなく私は常に携帯している。もうひとつのICレコーダーと、旧式のカセットテープを使うレコーダーだ。後者は、私が純然たる趣味で手放せないでいるものだった。

「編集長のレコーダーなら、さつき僕が電池を取り替えて、動作テストをしておきましたから、大丈夫ですよ」

パソコン画面でレイアウトのチェックをしていた野本君が、我々を振り返って言った。半年ほど前に採用したアルバイトの大学生で、国際経済学を学ぶ二十歳の青年だ。万事にまめまめしく気の利く、こざっぱりとお洒落な男の子で、ここで働き始めて三日後には〈ホスト君〉という綽名をつけられた。

本人はまったく嫌がらない。本当にバイトでホスト業をしようと、面接を受けて落ちたことがあるのだそうだ。

「あたしのレコーダーに触ったの？ 嫌だ、データを消しちゃったりしなかった？」

「消してませんけど、バックアップのコピーはとりました」

だから、編集長がフォルダを間違えてかぶせ録りしちゃっても大丈夫ですよ——という言葉を口にはせず、目顔で私に合図して寄越した。私は顔の半面、彼の方を向いている側だけで笑って応えた。

園田編集長はトートバッグを探ってICレコーダーを取り出すと、本当に野本君の言うとおりのか確かめるようにいじり始めた。

「あの爺さん、話が長いのよ」

「今日で終わりですよ」と私は言った。

「今まで録った分、みんなバックアップしてあるの？ それなら、前回のテープ起こしをやつといてくれないかしら」

「僕がやっていいんですか？ 井手さんに叱られちゃうんじゃないかな」

井手正男はこの同僚の一人である。「あおぞら」の歴史上、園田瑛子以外では初の、今多コンツェルン本家からきた社員だ。

「僕、嫌われてるから」

野本君は頭を搔く。染めていない黒髪、今風の気取ったカットで、園田編集長は最初の面接の後、「あのジャーニーズくずれの髪型を何とかしたいわね」と言っていたが、いっこうに何ともされる様子はない。実は気に入っているのかもしれないと、私は思う。

「安心なさい。井手さんが嫌ってるのはあんただけじゃない」

「いいんですか、そんなこと言って」

「本人がいらないんだから、いいじゃない。ここだけの話よ。会長の婿殿が秘書室に告げ口するかもしれないけど」

「私はへらへら笑って言った。「編集長、足が痛いからって、八つ当たりはいけませんね」

園田瑛子は「あおぞら」の編集長に就任すると同時に、制服はもちろん、キャリアアウーマン然としたスーツやパンプスとも縁を切った。季節を問わずいつでも、エスニック風の色とりどりでひらひらしたパンツルックで通している。

だが、彼女が「あの爺さん」と呼ぶ取材の相手——昨新春まで今多コンツェルンの取締役の一人だった森信宏氏が、初訪問の際の彼女の出で立ちにいたくご立腹になったので、仕方なしなし、このロング・インタビュの時だけは、クロゼットの奥から引っ張り出したスーツを着込み、「葬式用よ」と本人が自己申告する黒いパンプスを履いているのである。六センチヒールのそのパンプスは、気ままなファッションに慣れきった彼女の足にとっては、魔女狩りの拷問具に等しいらしい。で、機嫌が悪くなるのだ。

「ホントに今日で最後なのよね」

口を尖らせ、私を睨んで編集長は言った。

「あの爺さんがまだしゃべり足りないなんて言い出したら、あたし悲鳴をあげちゃうわ」

「インタビュは五回の約束です。今日で終わりですよ」

「記事は間野さんが書くんですよ？」

と、野本君が訊いた。椅子を回してこっちへ向き直っている。

「あたしが編集長のゴーストライターをやるんだって、張り切っていましたよ」

間野京子は四人目の編集部員だ。

「文章、巧いでもんね。店にいたときも、お客さんに配るペーパーとか、ホームページの記事とか、

みんな問野さんが書いてたんだって言ってた」

のどかなグループ広報誌にも、昨今の経済危機の波は押し寄せている。社員、準社員四名とアルバイト一名という編成は、これまででもっとも小さい。しかも、そのうちの一人の井手さんはほとんど戦力外ときている。

一方、本人が自負するとおりに文章の巧い問野さんはよく働いてくれており、アルバイトとはいえ貴重な戦力である野本君とも仲がいい。彼女は三十歳になったばかりで、編集部内では野本君といえばん歳が近いということもあるのだろう。

「あのね、何度も言わせないで」

園田編集長が陰しく目を細め、野本君を叱った。スーツに合わせて濃いめにメイクしているので、そんな表情をみると、^{まぶた}瞼の上のシャドウが光る。

「〈店〉って言うのはやめなさい。せめて〈前の職場〉って言うのよ。また井手さんの神経に障るんだから」

「だって、いないからいいって」

「いないときに言っているのは、悪口よ。こういうことは、いないときにこそ、しっかり習慣をつけとかないと駄目なの」

問野京子の前の勤務先は、義父が買収して傘下に入れた高級エステサロンである。義父のすることに無意味なことはない。ここは高名な舞台女優の御用達で、宣伝や広告は一切せず、紹介のない客は受けず、法外な代金をとるが顕著な効果をあげるといふ。これには菜穂子の保証がある。

問野さんは腕のいいエステティシャンで、それも菜穂子の折り紙付きだった。ところがその彼女が、家庭の事情のために、顧客の都合によっては不規則な勤務を強いられることのあるその仕事が続けられなくなった。普通ならただ辞めてしまうところだが、その腕前と明るい人柄に惚れ込んだ菜穂子が、

また元の仕事に戻れるようになるまで、九時五時勤務で確実に週休二日がとれる「あおぞら」編集部へ、彼女を推挙したのだ。「お父様、お願いがあります」と。

私の妻、杉村菜穂子は、どのような形でも今多コンツェルンには関わらない。ましてや人事に口出しするなど、これまで一度もなかった。間野さんのことは例外中の例外だ。そして義父は、愛娘のこの異例の行動に驚き、喜んだ。思うに、義父は、いつペンぐらい菜穂子がこういうわがままを言ってきたくないかと、密かに待っていたのかもしれない。

どんなに鼻の下を伸ばしていようが今多嘉親は今多嘉親だった。義父は菜穂子には知らせず、間野京子の評判や能力を調べさせた。こういうときに活動（暗躍）するのは、言葉の真の意味で会長直属の秘書室の連中で、彼らの調査報告を受けて満足した義父は、迷わず間野さんを「あおぞら」に引張った——という次第だ。

こうしたいわば情実人事に、園田編集長は動じなかった。なにしろ私、杉村三郎さぶらうという厄介なお荷物を背負っているのだ。今さら何があっても驚かない。会長のご指示どおりにいたします、と一礼するだけだ。

間野さんは明るく気取りのない人柄だった。仕事熱心で、意外な文章力があることも、義父は調査して知っていたのだろうし、間もなく我々も知ることになった。どこにも問題はない。

ただ、井手さんが絡むと、少しばかりこんな不協和音がたつ。で、大ざっぱなようできて意外に神経の細かい編集長が、裏に回って気を使うというわけだ。

「僕は井手さん、大人げないと思うけどな」

野本君は不満そうに咬くはびいて、右の耳たぶをいじった。ピアス穴が三つある。もちろん、ここで勤務しているあいだは、穴だけだ。

「だってあの人、いくつです？」

「四十七歳よ」

「うちの親父とひとつしか違わないや。いい加減、小学校の優等生みたいなカラ威張りはやめるべきですよ」

編集長は横目になった。「ホスト君、あんた、四十七歳になる日を楽しんで待つてなさい。あたしがタイムマシンに乗って現れるから。で、チェックしてあげる。あんたが部下に向かって空威張りするサラリーマンになってないかどうか」

午前十一時、園田編集長と私は東京駅から特急に乗った。

「あたしの子供時代なら、泊まりがけで海水浴に行ったような場所よ」

この台詞を聞くのも五回目だ。

「まだ納得いかないなあ。森さんって、絶対に海辺の別荘地で隠居するようなタイプじゃないもん。現役感バリバリなんだし」

「だから話も長いんです」

「でしょ？ だったら都心に住んで、どっか系列会社の監査役か何かやればいいのよ」

大ざっぱなようでいて繊細な園田瑛子は、繊細なようでいて意外な死角を持つ人物でもある。大手都銀から引き抜かれ、今多コンツェルンの財務畑ひと筋を歩んできた森取締役は、なるほど七十歳になったからといって隠居するような人物ではない。彼がすべての役職から退き、房総半島の海辺にある別荘地〈シースター房総〉に引っ込んだのは、彼自身のためではなく、認知症を患っている夫人のためだ。編集長がそれに気づかないのは、当の夫人がまったく私たちの前に現れないからだろうし、しかもその上に誤解を重ねている。きつと見高けんたかな〈奥様〉で、窓際族のグループ広報誌の編集部にそんなか、挨拶するには及ばないと軽んじているのだらう、と。他には何の根拠もないのに、一途にそ

う思い込んでしまふところは、流人の島の長にもそれなりの鬱屈うづくとコンプレックスがあるからだろう。それが死角をつくるのだ。

森夫人の病状を、私は事前に知っていた。義父から聞いていたのだ。そして、本人が言い出さない限り話題にはいけなさと釘を刺されていた。

だが、インタビュアーは今日で終わりだ。編集長がいつか、まるで見当違いなところで森夫妻の闘病について聞かされ、深い自己嫌悪に陥るのを防ぐために、打ち明けてもいいタイミングだと思ったから、私はそうした。

ペットボトルの緑茶を手に、しばらく黙り込んでから、彼女は訊いた。「あのへんに、いい病院があるのかしら」

「専門の介護施設があるんですよ。いよいよとなったら、夫人をそこに入院させる予定だそうです」
「そう……」

またちょっと黙ってから、気の強い小学生のような顔をして、編集長は言った。

「でもやっぱり、森さんの話は長いわよ」

目的の駅のホームに降りると、潮風に吹かれながら、我々は駅舎のすぐそばにあるファミリールストランに向かう。ここで昼食を済ませ、午後一時ジャストに森邸のインタフォンを鳴らすというのが毎回の段取りだ。住み込みの家政婦さんが我々を出迎え、外房の海を見おろすことのできるリビングに通してくれて、インタビュアーが始まる。

三時になると休憩をとり、家政婦さんが茶菓を持ってきてくれる。三十分ほど休んでまた再開し、終わるのは毎回六時過ぎだ。社内報に載せる記事を書くには長すぎるインタビュアーになっているのは、この聞き書きを元に、グループ広報室の編集で森取締役の回想録を出そうという企画があるからだ。もっともこちらは、実現するかどうかまだ確定していない。出版については、インタビュ

1を原稿に起こしたものを森氏が読んで、彼の仕事人生に照らして恥ずかしくないものになっていると確かめてから決めるという。

精悍せいけんな小兵である義父とは対照的に、森信宏氏は偉丈夫偉丈夫だ。若いころには美丈夫と呼ばれたろう。ゲルマン系のDNAが混じっていいような彫りの深い顔立ちで、肌は白く瞳の色は淡い。このインタビュウでは持ち出せない話題だが、かつては財界人のなかでも指折りのモテ男だったそうだ。

挨拶を済ませると、いつものようにてきばきと、森氏はインタビュウに取りかかった。麻のシャツの上にジャケットを着ている。日焼けしているのはゴルフのせいだ。その気にさえなれば、今でも充分な艶福家えんぷくかになれることだろう。

最終回の今日は、森氏が今多コンツェルンの財務トップの座に就いてからの話になる。ときどき、どきりとするほど鋭い今多嘉親批判が飛び出して、そのたびに編集長が横目で私を見るのが可笑しい。失敗は失敗、善政は善政、今はまだそれを判断できる段階ではない事柄には、はつきりとそう言う。私はむしろ爽快だった。きつと義父もそう言うだろう。

休憩後の後半は、インタビュウ全体を概観したまとめの話になった。森氏の人生論も混じり始めたので、家族のこと、夫人のことが話題になってもおかしくなかったから、私は少し緊張したが、我が（金庫番）の明晰めいせきな頭脳と滑らかな口舌には、それは余計な心配だった。

「まあ、だいたいこんなところかな」

肘掛け椅子に座り直し、脚を組んで森氏は言った。リビングのフランス窓の外には、水平線あかねざらに茜色をひと筋残して、暮れゆく海の絶景が広がっている。

「書き起こしてもらった原稿を見て、手入れが必要などころには書き込むよ。私の記憶が曖昧あいまいな部分もあるだろう」

「畏れ入ります」

並んで頭を下げる我々に、森氏は笑いかけた。「疲れたろう。私はクタクタだよ」

「毎回、長い時間を頂戴してしまいました」

「いや、暇な身体だからそんなのはいいんだ。ただ、この歳になると、思い出すってことそのものが大儀なんだよ。蓋をしておきたいことが一緒に出てきてしまうのを、いちいち押し戻さなくちゃならないからね」

家政婦さんと呼んでコーヒーをお代わりすると、「君らも、熱いのを飲んでいきなさい。いつも何の愛想もなくして申し訳なかった」

「とんでもないことです」

姿勢はそのままに、森氏のモードが切り替わったのを、私は感じた。

「杉村君」

「はら」

「菜穂子さんはお元気ですか」

眼差しが柔らかくなっていた。

「おかげさまでつつがなくなっております」

「それはよかった。僕は菜穂子さんが独身時代に、うちの家内の活動の関係でお会いしたことがあるんですよ」

自称が〈私〉から〈僕〉になり、ですます言葉になったのは、元部下ではなく今多家の親族である私に話しかけている、というアピールだろう。賢明な編集長は、しとやかに録音機器やメモの後片付けをしている。

「家内は、いろいろと手広くボランティアみたいなきことをしていたからね」

菜穂子がそれを手伝ったことが、何度かあったのだそうだ。

「あれは、視覚障害者向けの録音図書を充実させようっていうグループ活動だったかな」

「菜穂子は図書館で、児童書の読み聞かせボランティアをしています。独身時代から続けていること
のようです」

「ああ、じゃあそっちのスキルを買って、家内がお願いしたんでしよう」

家政婦さんが来てコーヒーカープを並べ替えるのを、編集長が手伝った。

「うちのは何しろ顔が広くって、人使いが荒かったから、菜穂子さんにもご迷惑をおかけしたかも
りません。しかし素晴らしいお嬢さんで、感嘆しました。あのときばかりは会長が羨ましかったな
あ」

「ありがとうございます」

「うちに息子がいたら、菜穂子さんを嫁にくれとねだるのにと、家内も言っていた。それから間もな
くですよ、君にさらわれてしまったのは」

私に何も言わず、「いやはや伏兵でした」と笑って、続けた。「でもね、なまじグループ内の誰か
と姻戚関係になるよりも、君のような自由な男と結婚して、菜穂子さんは幸せですよ。僕も……そう
だな、この歳になって、ちっとは生臭さが抜けてきたから、そんなことを思うんだらうけど」

編集長がしとやかに微笑してくれているので、私も同じ表情を決め込んだ。

「君もいろいろ気苦労が多いでしょうが」

森氏は私の目を見て言う。

「菜穂子さんの幸せを守ってあげてください。ほかのどんなことよりも、生涯の伴侶と決めた女性を
幸福にすることが、男にとって最大の務めです」

私はまた頭を下げた。「お言葉、肝に銘じておきます」

過去四回にはなかったことだが、森氏は辞去する我々を玄関先まで送ってくれた。家政婦さんが先

に立ち、車回しの先の門扉を開けに行く。

「おしまいに来て弁解するようだが、家内が一度もご挨拶をせず、失礼しました」

このタイミングで言おうと準備していたのだろう、淀みない口調だった。

「杉村君の耳には入っているでしょう。家内はだいたい、状態がよくなくてね」

私は曖昧にうなずき、編集長はその私に、何のことかしらと問うような顔をした。行きの特急で打ち明けておいてよかった。

「認知症なんだよ」と、森氏は編集長に言った。「この家で、一年ぐらいは一緒に暮らせるかと思っていたんだが、どうも無理のようだ。私も辛いし、家内にはもつと酷だろう。いや、本人はもう何もわからんと医者と言うんだけど、私にはね、今の家内のなかに閉じこめられてしまった昔の家内が、自分のこんな姿を見ないでくれと、泣いて怒っているのがわかるんだ」

家政婦さんは門扉のそばで待っている。強い海風に、彼女のエプロンの裾がうすひるがえる。

「私が言うのも何だが、才色兼備の、そりゃいい女だった。婆さんになつてからも、いい女だった。菜穂子さんにも負けないくらい」

言って、森氏は私の肩をぽんと叩いた。

「余計なことを聞かせました。ところで、いつもタクシーを呼ばないのかな？」

我に返ったように、編集長が姿勢を正した。「はい。バス停がすぐ近くにございますから」

「へしおかぜライン」という、あの黄色いバスだね？」

駅からこの〈ヘシースター房総〉を巡って巡回する路線バスである。一時間に一本ぐらいの運行なので、行きはタイミングが合わずにタクシーを使うが、時刻表をチェックしてみたら、帰りはちょうどいい頃合でバスが来るとわかって、便利に乗っている。「あおぞら」もご多分にもれず緊縮財政だから、節約できるところは節約する方がいい。車体がきれいで乗り心地がよく、いつもガラガラのバス

で、しかも帰りの特急の乗り継ぎにもびたりと合っていた。

「あのバス会社は、このデベロッパが買い取って子会社化したんだよ。引退してから別荘地に定住しようなんていう年寄りの夫婦だと、自家用車の運転ができない場合もあるからね」

「それは存じませんでした」

空いている割にはいい車体なのも、それを聞けば納得がいく。

「ほかにあと三路線ぐらい走らせているはずだ。赤字ばかりの小さいバス会社だけでも、潰れてしまえば地元の人たちの足がなくなる。環境破壊をしまくって、銭金のことしか考えてないと言われろデベロッパだつて、たまには善行を為すわけさ」

私は言った。「そのことに、本のなかで触れてはいいかがでしょうか。あとがきでもよろしいかと思えますが」

森氏は軽くまばたきした。「そうだね。いい考えかもしれない。今の私がどんな場所において、昔を振り返って偉そうな口をきいているのか、読者にことわりを入れた方がいいかもしれないなあ……。まあ、何人いるか怪しい読者だけでも」

別れ際になって、森氏は気さくで温かな人柄の片鱗を見せてくれた。現役時代、外部の金融関係者からも、直属の部下たちからも、夢に出てくるほど恐れられた怖い〈金庫番〉は、実は秘書室の女性たちのあいだではいちばん人気の取締役だったということを、私は思った。

「会長に、どうぞよろしく伝えてください」

一礼して、森氏は言った。

「ご配慮、有り難く身に染みています」

我々も丁寧に挨拶を返し、門扉を通過して別荘地内の道路へ出た。芝生や花壇に縁取られ、ぶらぶら歩いて心地よく、車で通って便利な舗装道は、〈シースター房総〉の建物の配置と同じように、人間

工学的に考え抜かれた設計をなされているに違いない。

いつも我々が乗るのは、十九時ちょうどに〈シースター房総 サンセット街区〉というバス停に来る便だ。三分も歩けばたどりつくそのバス停が、今日の私には遠く感じられた。六センチヒールのせいばかりではなく、編集長も同じように感じているらしい。

「あだし、まだまだ素人だわ」

ふくらんだトートバッグを肩に、

「さっきみたいな言葉を、せめて二回目インタビューで引き出せなくちゃ、プロじゃないよね」

もつと話を聞きたかったな、と呟いた。

「チャンスはまだありますよ。さっきの感じだと、単行本の企画にも、すんなりとゴーサインが出そうじゃありませんか」

ぶらぶら歩いてゆくうちに、〈サンセット街区〉のバス停が見えてきた。透明な樹脂製で、近未来的なフォルムの雨よけに守られた黄色いベンチが、夕闇のなかにぼんやりと光っている。バス停の表示柱も、雨よけやベンチとデザイン・色調共に揃えてある。森氏の話聞いて今さらながら気づいたが、これらの設備も、デベロッパによって買収後に整備されたものだろう。

編集長と私はベンチに腰をおろし、てんでにパソコンと携帯電話の着信やメールをチェックした。いつもの習慣だ。月刊の「あおぞら」の発行業務は、最終校了日を除いてはさしてハードなものではないが、コンツェルン内の全業務・全企業にくまなく目配りする内容のものである以上、細かな修正や微妙な気配りを要することは多くて、その分、取材対象とのやりとりを頻繁に行うことになる。毎回、森氏のインタビューに午後を費やしてここに座ると、編集長も私も結構な量の返信待ちメールや留守録に直面するのだった。

「もう、嫌ねえ」

携帯電話の画面を見て、園田編集長が舌打ちした。

「(ウエルネス)が、また写真の差し替えを言ってきたる」

グループ内の健康食品・サプリメントの通販専門会社である。

「お試し七日間セットのパッケージを変えるんだって。そんなの前から決まっていたことなんだろうから、先に言えっていろいろのよね」

私の携帯メールには、菜穂子からの伝言があった。義姉から急なお声がかかりで、桃子を連れて夕食に行くからよろしく、という内容だ。午後三時過ぎに着信している。

〈了解 返信が遅れてごめん〉と、私はメールを返した。そして、ふと思いついた。

「編集長、どうでしょう、今夜は一杯やりませんか」

園田編集長は、「これから動物園に行きませんか」と言われたみたいな顔をした。

「何で？」

「何でって……インタビュ어가ひと区切りついたら」

「でも、誰か残ってるかしら」

毎回、このインタビュー後に機材を置きに編集部に戻っても、誰か残業していたことはない。そういう時期ではないからだ。

「編集長と副編集長の飲み会じゃ駄目ですかね？」

私は一応、副編なのだ。

「あたしが会長の婿殿とサシで飲むわけ？」

「たまにはいいでしょう」と、私は笑った。「新橋に、旨い焼鳥屋があるんです。以前、谷垣たにがきさんに連れていってもらったんですよ」

谷垣さんは、グループ広報室の元メンバーだ。定年退職し、今は夫人とのんびり暮らしているはず

である。

園田編集長お得意の〈会長の婿殿〉というフレーズは、私の綽名としてはきわめて穏当な方だ。陰では、スパイとかゲシユタポとか、腰巾着こしぎんちやくとか言われていることを、私は知っている。今多一族の寄生虫とか、会長の娘のヒモという陰口も。

頻繁に顔ぶれの変わるグループ広報室のメンバーと、私はこれまで仲良く働いてきた。それでも、表向きはうち解けて仲良くなったとしても、誰かが私に「一杯どうですか」と誘ってくれることはなかった。それでも腰掛けのな職場にいて、いったいどんな奇特な社員が、会長のスパイで会長の娘のヒモなんかと親しくなりたがるだろう。なって得があるならいいが、何にもないのに。

だが、谷垣さんはそんな私に、「一杯やろう」と誘ってくれた。今でも、私はときどき無性にあの人が懐かしくなる。今夜のように、妻が急な外食などで娘を連れて家を空けるとき、一人でぶらりと件の焼鳥屋へ行ってみたこともあるくらいだ。

「美味おいしいの？」

「焼鳥はもちろん、煮込みも最高ですよ」

「へえ、いいわねえ」

編集長が携帯電話をしまいいくんだとき、バスが見えてきた。

〈しおかぜライン〉のバスの車体は、まったく近未来的ではない。旧式なステップのある乗り合いバスで、前の扉から乗り込み、中央の扉から降りる。運賃は全ルート百八十円均一だ。

白い車体に、幅広の黄色いラインが、バスの左右の窓を挟むように走っている。この黄色がとても鮮やかなので、印象としては「あの黄色いバス」になるのだ。フロントガラスのまわりは、涼やかなブルーのラインで囲んであるのだが、こちらはあまり目立たない。

昨今の路線バスはだいたいそうだが、窓ははめ殺しで開閉できず、その分、サイズが大きいので、

遠目からでも車内が見通せる。

ベンチから腰を上げ、編集長が言った。

「珍しいこともあるもんね。今日はお客さんがいっぱいよ」

実は、いっぱいというほどではなかった。六、七人の乗客がシートに座っているのが見えるだけだ。ただ、それでも「いっぱい」と表現したくなるほど、このバスががらんとしていることに、私たちは慣れていた。

白と黄色の車体がゆっくりとバス停に寄ってきて、停車した。中央の降車ドアは閉じたまま、前の乗車ドアだけが、ぶしゅうと圧搾空気の抜ける音をたてて開いた。

「お待たせいたしました。ヘシースター房総 サンセット街区です」

編集長が先にステップを上り、運賃を支払った。真ん中の通路を歩いて、後部座席へと進んでゆく。私も続いた。

「ご利用ありがとうございます」

水色の制服に制帽をかぶった、女性の運転手だ。歳は三十代半ばぐらいだろうか。前回乗ったときもこの人が運転していて、私は顔を覚えていた。色白で下ぶくれで、ちよつと眉の薄いところが、私の姉に似ていたからである。但し、この女性運転手の甘やかなアナウンスは、姉の声とはまったく違う。姉は何でもはっきり言う人で、声音もその気性によく合っていた。

手すりにつかまりながら奥へ進んで、編集長は最後列の座席に座った。

「発車いたします。おつかまりください」

私は編集長からひとつ席を空けて、並びに座った。バスはゆらりと傾いで発車した。

中央の降車ドアから前は、一人掛けの座席が左右に並んでいる。降車ドアから後ろは、ステップが二段あがっていて、二人掛けの座席が三列、通路を挟んで、前部と同じように左右対称に並んでいる。

そして最後列には、車体の幅いっぱい五つの座席が並んでいる。

乗客は、私と編集長を除いて六人だった。前部の一人掛けに四人、後部の二人掛けに二人。この二人はバラバラに座っているから、連れではなさそうだ。

右の窓際の座席で、編集長がおやという表情になった。

「ねえ、杉村さん。あれ」

指でちよいちよいと正面をさす。乗車口の上部に設置されている液晶の掲示板だ。二行になっていて、上の行にはこのバスの路線名と番号が表示され、下の行には次のバス停の表示が出る。いつもはそれだけなのだが、今は下の行の表示の文字が、右から左へ動いていた。

「しおかぜライン 02系統はただ今運行を見合わせています ご迷惑をおかけいたします しおかぜライン 02系統は」

この路線は03系統である。駅から真っ直ぐ南下して市街地を抜け、〈シースター房総〉の広大な敷地に達すると、その外側を時計回りにまわって走っている。

「02系統って、どこを走ってたっけ」

何があったのかしらねという編集長の呟きに、私のひとつ前の二人掛けの通路側にいた乗客が、こちらを振り返った。

〈「クラステ海風」へ行くバスなんですけどね。交通事故で、道路が通行止めになっちゃってるんです」

六十年配のご婦人である。白髪を薄紫色に染めたショートヘア、襟元に刺繍のついた黒いアンサンブル。軽快でお洒落な出で立ちだが、隣の席には大きなポストンバッグが置いてある。

「事故を起こしたトラックの積み荷のせいで、何だか大騒ぎらしいですよ」

〈「クラステ海風」とは、近々森夫人が入るのであろう介護施設の名称だ。〈シースター房総〉の東側に

隣接している。事故が起こったという道路は、そこへ通じているのだろう。

「トラックが事故って、積み荷を道路にばらまいちゃったんですか？」

編集長が前の座席の背もたれに手を乗せて、身を乗り出した。

「そうらしいですよ。ひどい臭いなんですって。何ていうんですか、ホラあの、蒸発するような」

「揮発性ですか？」

「そうそう、そういうものを積んでたから、道路沿いの家の人が避難したとか」

あらまあと目を丸くして、編集長はまた携帯電話を取り出した。ニュースをチェックしようというのだろう。

「事故は何時ごろのことですか」と、私はご婦人に訊いた。

「さあ、バスが止まったのは一時間ぐらい前だったかしらねえ」

「ヘクラスト海風」の方々も避難したんでしょうか」

人体に有害な揮発性の液体が道路にぶちまけられたのであれば、これは大事だ。お隣のヘシースタ「房総」にも、何らかの情報もたらされて然るべきだろう。

「あっちは風上だから、大丈夫だったみたいですよ」と、ご婦人は言った。「心配ないって、アナウンスがありましたから」

私はちよつと考えて、理解した。どうやらこのご婦人は、事故の一報が入ったとき、ヘクラスト海風」にいたらしい。誰かの見舞いか、あるいは職員なのか。それで現場で、当施設に事故の影響はないという情報を得たのだ。

「ニュースには出てないなあ」

携帯を閉じて、園田編集長が言った。

「ネットのニュースも、意外と遅いことがあるのよね」

あるいは、ご婦人の言葉から我々が勝手に推測するほどの重大故ではないのかもしれない。揮発性の液体といってもいろいろある。たとえばベンキでも臭いはひどいだろうし、道路は一時通行止めになるだろうが、それで死傷者が出るようなことはなからう。

「次は〈シースター房総 メインゲート前〉です」

女性運転手の甘やかなアナウンスが響いた。バスがスピードを落とし始める。

〈サンセット街区〉のバス停から終点の駅前ターミナルまで、バス停は七つある。距離は四キロ弱くらいだ。〈メインゲート前〉を後にすると、バスのルートは〈シースター房総〉を離れ、海沿いからも遠ざかり、畑や雑木林のなかを抜けながら市街地に向かってゆく。

乗車用のドアは開かなかった。前部の一人掛けに座っていたサラリーマン風の男性が、降車ドアから降りていった。黒い鞆を提げて、メインゲートの先にある〈シースター房総〉の総合管理事務所へ向かってゆく。

「発車いたします。おつかまりください」

アナウンスが終わるのを待って、編集長はまたご婦人に話しかけた。「ご近所にお住まいなんですか」

「わたしは西船にしふねから通ってるんですよ。母が〈海風〉におりますんで」

「まあ、それは大変ですねえ」

薄紫の白髪染めのご婦人は、にこやかに笑って軽く片手を振った。

「いえいえ、母はあちらでよくしていただいていますから、安心なんです。でも今日はホントにびっくりしました。いきなりバスが止まっちゃって」

02系統が動いていないので、〈クラステ海風〉の敷地内を歩いて、

「別荘地のなかの〈イースト街区〉っていうバス停がいちばん近かって教えてもらって、そこからこ

のバスに乗ったんです」

編集長も、ご婦人の隣席の重そうなポストンバッグに気づいていたらしい。ちょっと憤激した口調になつて、

「〈クラステ海風〉じゃ、乗り物を手配してくれなかつたんですか。ケチねえ」

「急でしたから、しょうがないですよ」

ご婦人の方はおっとりしている。

「お二人は、別荘の方ですか」

「〈シスター房総〉の住人かという意味だろう。今度は我々が笑つて手を振つた。

「とんでもない。仕事で行つてたんです」

「そうですか。素晴らしい別荘地ですよねえ」

「〈クラステ海風〉も、わたしは外側からしか見たことありませんけど、素敵ですよね」

「本当はお高いんですよ。入居料がね」

ご婦人はまわりを憚る顔はばかになつた。

「うちの母は運がよくつて、県が補助金を出してる部屋にあつたんです。昔っから、くじ運だけは強い人でしてねえ。おかげさまでわたしは本当に楽になりました」

次のバス停〈滝沢橋〉が近づいてきた。アナウンスが流れるが、ボタンを押す乗客はいない。

二車線の道路の両脇に藪と空き地と、瘦せた畑が広がっている。このあたりは住宅地ではなく、工場地でもない。市街地と〈シスター房総〉に挟まれて、もろもろの開発から置いてきぼりを食つたような、寂しい眺めだ。バス停の名称になつている滝沢橋も、狭い水路の上にかかった、赤錆あか錆の浮いた小さな鉄橋である。スペースがなかつたのか、ここはバス停もリニューアルからはじかれていて、昔風の台座付きの丸い看板だけがぼつりと立っている。

「〔滝沢橋〕を通過いたします」

女性運転手のアナウンスで、編集長とご婦人のおしゃべりにも区切りがついた。編集長はまた携帯を取り出し、薄紫の白髪染めのご婦人は、進行方向に向き直った。

空は既に、浅い夜に変わっている。街路灯の光が届かない部分は真っ暗だ。都心からたかだか一、二時間程度の距離でも、開発に見合う条件が揃わなければ、こんな景色になってしまう。

走行中のバスのなかで、右側の一人掛け席の真ん中に座っていた男性が立ち上がった。薄い灰色の背広の上下姿だが、サイズが合わないのか、妙にぶかぶかだ。手すりにつかまりながら危なっかしく足を運んで、運転席に近づいてゆく。

痩せて小柄で、まばらな頭髪は真っ白で、背中が少し曲がっている。かなりの年配者だ。右肩から斜めに幼稚園掛けしたバッグに右手を突っ込み、何か取り出そうとしている。

運転手と乗客の距離が近い乗り合いバスでは、ときどきこんな光景を見かけるものだ。誰でも経験があるだろう。何かちよっとした用件で、乗客が運転席に近づくのだ。このバスは〇〇というバス停に停まりますか。すみませんが、〇×まで行きたいんだけど、どこかで乗り換えなといけませんか。一日乗車券がありますか。回数券をください。定期券を買いたいんだけど、営業所はどこですか。両替してもらえますか。

乗り合いバスの乗降口には、乗客への「お願い」が掲示してある。走行中に立ち上がらないでください。みだりに運転手に話しかけないでください、と。

よちよちと運転席に近づくあの白髪頭の老人は、しもぶくれの顔と甘やかな声の女性運転手に、何を言おうというのだろう。気にするというほどではないが、私はぼんやりと眺めていた。

運転席と通路を隔てる金属製の横棒に、左手でしっかりとつかまると、乗降口のステップを背にして足を踏ん張って立ち、白髪頭の老人は、女性運転手の方にかがみ込んだ。それとほとんど同時に、

幼稚園掛けのバッグから右手を引っ張り出した。

バスはちょうど赤信号で停車した。女性運転手が老人の方に目を向けた。運転席の明かりに照らされて、帽子の庇ひさしの下のにこやかな横顔が、最後列の私からもよく見えた。

白髪頭の老人がバッグから取り出し、彼女の顔の真ん中に——目と目のあいだに、眉間まゆまにくつつきそうなほどの近さで、ぐいと突きつけたものも、よく見えた。

拳銃だった。

我々の生活のなかには、数多の道具が存在する。ごく日常的なもので、誰でも名称と用途を知っているものもあれば、日常的に過ぎるので、用途は知っているし使ったこともあるけれど、正式名称は知らないというものもある。

それとは対照的に、頻繁に目にするけれど、使ったことはないというものもある。名称も用途も知っているけれど、普通の人間には用のない道具だ。いや、普通の人間が手にしたり使うことを禁じられている道具だ。走行中のバスのなかで、みだりに運転手に話しかけてはいけないという以上の、強い禁忌に縛られている道具だ。

拳銃は、その代表選手だろう。

白髪頭の老人はそれを手にして、女性運転手に銃口を向けている。

私はそれを見た。その光景を見た。それなのに、のんびり座っていた。

たぶん、ほんの数秒のことだったろう。でもそのときの私の気分は、確かにへのんびりのんびりだった。

目の前の出来事があまりに突飛だったからではない。誰かが誰かに拳銃を突きつける。そんな場面を、我々現代人は見慣れている。ドラマや映画などの映像のなかで、毎日のようにお目にかかっている。いささか食傷するくらい、数え切れないほどの「手をあげろ」シーンを目撃している。

だから私はへのんびりのんびりしていた。それが映像のなかの出来事ではなく、目の前の現実の一断片だ

と理解するまで、脳が手間取ってしまったからだ。

それは私一人ではなかったらしい。女性運転手の表情も、すぐには変わらなかつた。銃口が目の近くにありすぎて、とっさに瞳の焦点が合わなかつたのかもしれない。

拳銃を突きつけながら、白髪頭の老人は何か囁きかけている。

私は我に返つた。女性運転手も事態を認識した。彼女ははっと身じろぎ、白い手袋をはめた手が、ハンドルの上で滑つた。

「ウソお」と、誰かの声が出た。

運転手ではない。右側の一人掛けの座席の先頭にいる、若い女性の声だった。

「嘘でしょ？ 何これ」

ほとんど笑い出しそうな声だった。座席から立ち上がって中腰になっている。

白髪頭の老人は、あのよちよちした足取りとは裏腹な素早さで、蛇が鎌首をもたげるように、さつと銃口を彼女の方に向けた。

「すみませんが、お嬢さん。静かに座っていてください」

このバスは、アイドリング・ストップのバスだった。信号待ちやバス停で停まると、エンジンも止まるのだ。だから車内は静かで、拳銃を手にした老人の囁かれたような囁き声を邪魔する騒音はなかつた。

若い女性は中腰のまま凍りついた。私は座席のシートから腰を浮かせた。前の席の年配の婦人の表情は見えないが、今、隣の座席のポストンバッグを引き寄せたところを見ると、事態を認識してはいららしい。

編集長は？ 横目で見ると、窓ガラスに頭を持たせかけて居眠りしている。

さっき一人降りたので、老人も入れて乗客は七人だ。

「おい、爺さん。何のつもりだ」

野太い声で呼びかけたのは、左側の一人掛け席に座っている紺地のポロシャツの男性だった。私のところからでは肩胛骨けんこうこつから上しか見えないが、それでも充分に大柄だとわかる体軀である。ポロシャツの背中はぱつんぱつんで、横皺よこじわが寄っている。

「運転手が女だからって、からかっちゃいかん。そんな玩具おもちゃ、とっとと引っ込めろ」

太いのは声と身体だけではなく、肝っ玉も同様であるらしい。ポロシャツの男性は席から立ち上がると、前に出ようとした。

白髪頭の老人は、彼に拳銃を向けた。また素早い動きで、銃口はまったく揺れない。

「ちよっと！ やめた方がいいです」

編集長のふたつ前、二人掛けの窓側の席から声が飛んだ。こちらは若い男性だ。スポーツマン風の短髪に、半袖の黄色いTシャツ。思わずというように片手をあげ、ポロシャツの男性を制止してから、その手をじわじわと引っ込めた。

「玩具なんかじゃない。この人、本気ですよ」

中腰のままだった若い女性が、ゆっくりと身をよじり、彼らの方を振り返った。

「嘘でしょ」と、若い女性はまた言った。可愛らしい声だが上ずっている。白いブラウスにチェックのキュロットスカートをはき、白いズツクの踵かかとを踏んづけている。

「嘘よね？ それ本物じゃないでしょ？ モデルガンですよね？」

白髪頭の老人は、にこりともせず、彼女の引き撃ひきうちった笑顔を見返した。そして手にした拳銃に、ちらっと目を落とした。

「いえ、本物のはずです」

彼は無造作に右手を持ち上げ、銃口をバスの天井に向けた。我々の誰も、何も言えず何をする間も

ない瞬時のことだった。

パン、と発砲音がした。

私は一瞬、目をつぶった。

バスの天井の凹凸のあるパネルに穴が空いた。発砲音にかぶって、パネルが割れる音が響いた。そちらの方がずっと大きな音だった。

編集長が飛び起きた。目を丸くしている。

みんな無言だった。誰もその場を動かない。呼吸さえ止めていた。

「なあに？ どうしたの？ 事故？」

とんちんかんな問いを放って、園田編集長が私の方に身を寄せた。そしてようやく、運転席の脇に突っ立っている小柄な老人の手のなかにあるものに気づいた。

「あれ、ピストルじゃない」

誰も動かず、答えない。

「何やってんのよ」

部下の広報部長が出した伝票に疑義を呈するときのような口調だった。ちよつと、これは何よ？ 納得いくように説明しなさい。それがあまりに園田瑛子らしかったので、私は笑い出しそうになった。まったくマイペースな人だ。その感情が、私に己を取り戻させてくれた。

「編集長、静かに。じっとしててください」

「そうです。皆さん、お静かに願います」

そう言っ、白髪頭の老人はにっこり笑った。今や銃口は天井ではなく、我々に向けられている。女性運転手以外の六人ならば、いつでも、誰を撃つこともできる位置と高さに。

「わかっていただけましたか、お嬢さん。これはモデルガンじゃありません。本物の拳銃なんですよ」

白いブラウスの若い娘は、ぶるぶると小刻みにうなずいてみせた。

「わ、わかりました」

キュロットスカートの裾も震えている。彼女の膝が笑っているのだ。

「あなたもわかってくださいましたか」

老人はポロシャツの男性にも訊いた。いつの間にか、彼は完全に立ち上がっている。

「わかったよ」

答えて、ゆっくりと両手を上げ、ついでの手を頭の後ろに持っていて、指を組んだ。

「これでいいか？」

「ありがとうございます」

老人は丁重に言って、また微笑した。

「皆さんも、この方と同じようにしていただけますか。ああ、立たなくて結構です。座ってください」

指示に従い、我々は座席に腰をおろしつづ、のろのろとホールドアップの姿勢をとった。

運転席を横目で見て、老人は言った。「運転手さんお願いします」

女性運転手の手はわなないていた。白い手袋のせいで、はつきりわかる。

こんな格好をすると、やたらと目が動いてしまうものだ。いわゆる〈泳ぐ〉のだ。と、遊泳中の私の目が前列の年配のご婦人をとらえた。彼女は手を頭に持っていて、上品な薄紫色に染めた髪にうついた異物に気づいた。さっき飛び散った天井のパネルの破片だ。どうするかと思えば、当たり前のようにさっさと払い落とす。それから頭の後ろで指を組み合わせた。私はまた笑い出してしまいそうになって、きつくくちびるを噛みしめた。

「ねえ、質問があるんですけど」

編集長が、まだ伝票の数字に釈明を求めるような口調のまま、やや声を張り上げた。

「これって強盗なのかしら。あなた、お金がほしいんですか」

これまた園田瑛子らしく端的だった。ホールドアップしていなかったら、私は手で目を覆うところだった。

同じ気持ちの乗客が、少なくとも一人はいるようだ。黄色いTシャツの青年が、信じられないというように目を剝いて、編集長を振り返ったのだ。

すぐさま老人が声を上げた。「その君、動かないでください」

Tシャツの青年は、半端に身を振ったまま静止した。目も剝いたままである。

「強盗ではありません、奥さん」と、老人は依然、丁寧な口調で答えた。しかも外見とはまるでそぐわない、張りのある若々しい声なのだ。まるで、枯れてしぼんだ老人の身体のなかに、働き盛りのビジネスマンが隠れているかのようだ。

「あたし、奥さんじゃないんですけど」

「編集長、いい加減になさい」

思わず私が口を出したら、老人は拳銃を構えたまま、またにっこり笑った。

「あなた方お二人はご夫婦ではなくて、上司と部下なんですわね。出版社にお勤めですか」

編集長は口を尖らせて答えなない。老人も、強いて返答を求めなかった。

「では次の段階に進みましょう。皆さん、携帯電話をお持ちですね？ まことに申し訳ありませんが、

一時、私に預けてください」

老人は半歩右に動いて、白いブラウスの娘に目を向けた。「まず、あなたからです。携帯電話を出してください。ゆっくりとね。取り出して、私に見せてください」

「手を、動かしていいの？」

「いいですよ。でもお嬢さん」

慇懃に、老人は彼女に言いかけた。

「あなたが何か余計なことをしたら、後ろの席の黄色いＴシャツを着た彼が死ぬことになります」

件の若者がびくっとした。白いブラウスの娘は振り返り、彼を見た。

「お嬢さんだけではありません。ほかの方々にも申し上げます。どなたかが私の隙について何かしようとしたら、彼の黄色いＴシャツにほかの色が混じってしまいますよ」

「わ、わかりました」

当の若者が、老人ではなく我々に言った。頭も首も動かさず、ただ顎だけがガクガクしている。

「皆さんも動かないでくださいね」

「わかったよ。動かんから」

ポロシャツの男性の野太い声は、いささか不穏な怒気をはらんでいる。

「ほらあんた、さっさとやれよ」

男にせっつかれて、白いブラウスの娘は膝の上のバッグの中身を掻き回し始めた。あわてているので、なかなか見つからない。

「こ、これ。わたしのケータイです」

パールピンクの小さな携帯電話をつかんで、老人の方に差し出そうとする。

「床に置いてください」

彼女は前屈みになってケータイを床に置いた。老人の手のなかの拳銃は、その動きにはつられず、びたりと黄色いＴシャツの青年に狙いをつけている。

「では、私の足元へ滑らせてください。ゆっくりとね」

彼女は指示に従った。パールピンクの携帯電話は、ほんの五十センチほど床を滑って、老人の靴の

爪先で止まった。光沢のない黒い革靴だった。

「ありがとう」

彼女に笑いかけ、銃口はそのままに、老人はさっと足を動かして、その携帯電話を横様に蹴った。携帯電話は派手な音をたてて、前部の乗降口のステップを落ちていった。

「次はあなたです。携帯電話を取り出して見せてください」

老人はポロシャツの男性に言った。銃口が動いて、ブラウスの娘に狙いをつけた。

「今度は、ほかの方々が余計なことをすると、このお嬢さんが悲しいことになります」

ポロシャツの男性は、ズボンの尻ポケットから携帯電話を取り出すと、顔の高さに掲げてみせた。

「では席を立てて、しゃがんで床に置いてください」

指示に従うポロシャツの男性の息が荒い。私のいるところからでもわかる。大柄だから息が切れやすいのか。それとも、怒りと緊張で今にもブチ切れそうなのか。

「私の足元に滑らせてください」

ポロシャツの男性は、その指示に従わなかった。携帯電話を床に滑らせて、直接、前部のステップの下へ落としたのだ。大きな音がした。

手を上げ、後頭部で指を組んだまま、白いブラウスの娘が震え上がった。

「これでいいんだろ」

床にしゃがんだまま、ポロシャツの男性は上目遣いで、歯を剥くようにして言った。

「はい、手間が省きました。席に戻ってください」

老人の穏やかな口調は変わらない。白いブラウスの娘が、ほうっと息を吐いた。老人との距離が近いせいもあって、この娘がいちばん怯えている。

「次は君です」

老人は黄色いTシャツの青年に目を向けた。銃口は白いブラウスの娘から動かない。うなずいて、青年は携帯電話を探し始めた。Tシャツの裾をめくり、穿はいているジーンズのポケットを叩く。見つからない。

「あれ？ あれ？」

白いブラウスの娘の両肘が揺れている。

「ご、ごめんなさい。ケータイがないんだ」

身体に火がついて、それを叩き消そうとでもしているかのようだ。

老人は落ち着きはらっていた。「シートの上に落ちていませんか」

青年はシートを手探りした。Tシャツの襟元の色が変わっている。冷汗の色だ。

「あった！」

勢い余って、つかんだ携帯電話を放り出してしまった。それは左側の空いた座席の上に乗って飛んできた。

「そのまま動かずにいてください」

老人は青年を制すると、私の前のご婦人に声をかけた。

「すみませんが奥さん——あなたは〈奥さん〉でよろしいでしょうか」

薄紫色の白髪染めがお洒落なご婦人は、ちよっと顎を引いただけで無反応だ。

「きれいな髪ですね」と、老人は彼女に笑いかけた。

「ああ、わたし？」

ご婦人は要領を得ない。だが老人は焦れない。笑顔は優しく、口調は辛抱強い。

「彼の携帯電話を拾って、手に持って、ステップを降りてきていただけますか」

銃口を向けられたまま、座席のなかで半身になってこちらを見ている白いブラウスの娘の頬が濡れ

ている。泣いているのだ。

「泣かないでください、お嬢さん」

拳銃を手にした老人は、諭すような口調で若い女性に言った。

「皆さんが私の言うとおりにしてくださいれば、そんなふうに泣かなくてはならないほど悲しいことも、怖ろしいことも、何ひとつ起こりません。お約束します」

「ご、ごめんなさい」

白いブラウスの若い女性は、鼻声で謝った。下を向いて震えながら、頭だけがぐくと動かす。息が乱れている。

「わ、わたし怖がりなんです。ごめんなさい、ごめんなさい」

黄色いTシャツの若者の携帯電話を手にしたまま、白髪染めのご婦人は中央のステップの縁に突っ立っている。

「これ、そっちに持って行けばいいんですね」

こちらは落ち着きはらっている。異様なほどの冷静さに、私は一瞬、このご婦人は事態を理解していないのではないかと疑った。あまりに突飛な出来事なので、この人には何が起こっているかわからないのではないか。

「まず、ステップを下りてください。奥さん、足元に気をつけて」

白髪染めのご婦人は、ためらう様子もなく動き出した。座っているときは気づかなかったが、足が悪いらしい。右手で携帯電話を握りしめ、左手で座席の背もたれにしっかりとつかまって、たった二段のステップを、身体を横にしてそろそろと下りてゆく。

「それじゃ、その携帯電話を私の足元に滑らせてください」

ご婦人はしゃがむ動作も慎重だった。膝を折るのが辛いらしい。

「……は？」

返事と共に携帯を手から放った。意外に勢いよく放ったので、小さな電話機は滑るといふより床の上を低く飛んで、一度落ちて跳ね返ってころころと転がった。

「ありがとうございます」

またその携帯を乗降口の下に蹴り落とし、老人は微笑した。

「では、次は恐縮ですが奥さんご自身の携帯です。同じようにしていただけますか」

ご婦人はまた無言で自分のバッグを探る。

こんな場合でなければ苛ついてしまうような鈍重な動きで、ご婦人は老人の指示に従った。次は私か編集長だと思ったら、老人は白髪染めのご婦人に指図を続けた。

「奥さん、次はそちらの会社員の方の携帯を受け取って、同じことを繰り返してください」

私は携帯電話を差し出した。私の携帯を蹴り落としてしまうと、編集長の番だった。

単調な繰り返しだった。若い女性の涙は止まり、乱れていた呼吸も鎮まった。誰も取り乱していな
う。

この場面を冷静な観察者の目で眺め、考えてみたら、チャンスだと思っただろう。老人の隙をついて拳銃を奪うとか、老人に飛びかかるとか、何かできそうなものだと思うだろう。振り返ってみれば私
だっただろう。

だが我々乗客は、みんな頭の後ろに手をやり、ぼさっと座って、携帯が床の上を滑ったり転げたり
しているのを漫然と見守っていた。私自身の頭にも、勇敢で思い切った決断は浮かばなかった。

まだ、どこか絵空事のような気がしていた。本物の拳銃を持つてはいても、弱々しい老人が一人き
りだ。無理をしなくても、自然に何とかなりそうな気がした。自然に？ 何が自然だ。こんな不自然
な状況で。

ようやく、乗客全員の携帯電話が前方の乗降口の下へと消えた。

老人は白髪染めのご婦人を労った。「ありがとうございました、奥さん。膝が痛いのはお辛いですね」

「関節炎なんですよ」と、彼女は言った。ここが病院の待合室で、たまたま隣り合わせた老人に、「あなたはどこが悪いんですか」と話しかけられて答えた——というくらいの口調だった。やっぱりピントがズレている。

「それじゃ、運転手さん」

女性運転手に向き直り、銃口も彼女にびたりと向けて、老人は言った。「すみませんが前のドアを開けてください」

一瞬、ためらったような間があった。それからドアが開いた。

「皆さん、動かないでください」

老人は後ずさりして乗降口に近づき、一段下りると、携帯電話を外に蹴り落とし始めた。

「あ」と、小さな声が出た。黄色いTシャツの若者だ。自分の携帯電話が蹴り出されるのを見て、思わず反応してしまったのだろう。

老人が微笑んだ。「すまないけれど、念のためにね。後で回収できるから、ちよつとのあいだ我慢してください」

若者に語りかけ、笑いかけつつも、老人の目も銃口も女性運転手から動かない。

私の脳裏を、通路を走り、老人に飛びついて、彼と彼の手のなかの拳銃ごとバスから外へ転がり出る自分自身の姿が浮かんだ。やればできそうに思えた。造作もないことのように思えた。

「さあ、これでいい。ドアを閉めてください」

老人がさっきの位置に戻り、ドアが閉まった。私の空想も終わった。

「運転手さんのお名前は、柴野しばのさんですね」
車内には運転手の名前が表示されている。

「柴野さん、バスを発車させてください。念には及びませんが、静かに出してくださいね」
急発進させろ——と、私の心のなかの私が言った。バスを揺らせて、あのじいさんを転ばせてしま
え。

「この人の携帯電話はいいのか？」

誰かと思えば、野太い声の持ち主、ポロシャツの男性だった。

「運転手だって携帯を持ってるぞ。いいのかね」

「かまわないですよ。気にかけてくださってありがとうございます」

老人がにこやかに答え、バスのエンジンがかかった。車体が震えた。

そのときになって、私は気づいた。滝沢橋を過ぎたこのあたりで、駅までの一本道は切り通しにさ
しかかる。もちろん道は舗装されているし、切り通しといったところで峻険しゅんけんな場所ではない。普段
なら気にもとめずに通り過ぎるだけだ。

が、今は違った。この場所には大きな意味があることに、私は気づいた。老人が拳銃を取り出し、
さっきの地点でバスを停めさせたことには、ちゃんとした理由があったのだ。

この先で、道はL字型に右に曲がっている。急発進したら、バスは切り通しのコンクリートの壁に
まともに衝突してしまうのだ。

ゆらりと、バスが動き出した。私の頭も動き出した。アクション映画の主人公のような自分自身を
夢想するためではなく、この状況をちゃんと把握するために。

この老人は、自分のやっていることをよく心得ている。弱々しい外見や動作を見くびってはいけな
い。

急発進できない場所で停車させたこと。乗客全員携帯電話を始末するために、誰かを動かさなければならぬという局面で、素早く動くことのできないあのご婦人を選んだこと。

そして今、バスを走らせ始めた運転手のこめかみに銃口を近づけていること。

「どうぞ、余計なことをせずにお願いします」

バスがL字型の角を曲がりきった。

「柴野さん、三晃化学へ向かってください」

老人の声は穏やかだ。

「場所はわかるでしょう？ 三晃化学の工場です。閉鎖になってから二年ばかり経ちますかね。ずっとあのままですが、買い手がつかないんですかね」

行き先も決めている。老人は、この先の計画を立てているのだ。思いつきでやっていることではな

い。
「三晃化学なら知っていますが、あの前の道には、このバスは入れません。手前の三叉路の高架下をくぐれないんです」

柴野運転手の甘やかな声は、わずかにかすれていた。

「脇道があるでしょう。ぐるっとまわって、通用門まで行ってください。以前は従業員用駐車場だったところが、空き地になっていますよね」

わかりましたと、柴野運転手は答えた。

まるでタクシー運転手と客の会話だ。どちらもこの地元に詳しい。サンコウカガクの場所も、その工場が閉鎖されて現在まで無人の状態であることも、そこへ通じる脇道があることも、女性運転手と老人には周知の事実なのだ。

「皆さん、どうぞお静かに」

老人は、柴野運転手に視線と銃口を向け、揺れる車内でしっかりと両脚を踏ん張って立っている。

「しばらくそのままご辛抱願います」

「なあ、じいさん」

ポロシャツの男性が、焦れたように声をかけた。ついでに手も下ろそうとする。

「あなた、何が目的なんだ」

「すみませんが手を上げてください」

ポロシャツの男性はわざとらしくため息をついてから、頭の後ろで手を組み直した。

「わかったよ。でもなあ」

「私の目的については、おいおいお話しいたします。今は、皆さんが余計なことをなさると、柴野さんが悲しいことになるということだけを考えていてください」

「——運転手さんを撃ったら、バスも事故っちゃいますよ」

Tシャツの若者が抗議するように言った。こちらはことさら殊勝に、頭のとっぺんでしっかりと指を組んでいる。

「それは困りますねえ」と、老人は真面目に言った。「ですから撃たせないでください」

事故を起こしても大事にはなりそうもないスピードで、バスは正規のルートから逸れてゆく。いつもは横目で通り過ぎるだけの、畑のなかを抜ける一車線の道に入った。

「おじいさん、本気なんですか」

老人は答えない。Tシャツの若者も、それ以上は訊かずに口を閉じた。

道なりに走って、やがて前方に、ひとかたまりのくすんだ建築物が見えてきた。へ合成化学肥料三晃化学株式会社」という古びた看板。スレート屋根の建物と、複雑に交差するパイプの群れ。錆びた煙突に、曇った窓ガラス。

対向車はいない。周囲に点在する人家に明かりはあるが、人影は見えない。自転車一台通りかからない。

老人が一瞬、柴野運転手から目を離れた。左手首の腕時計を見たのだ。

「少しスピードを上げてください。このバスが終点に着く時刻までに、三晃化学に行きたいんですよ」

柴野運転手は答えなかったが、バスは加速した。私は横目で編集長の表情を窺った。さっき、「あたしは奥さんじゃない」と言い返したときのまま、ムスツとしている。怯えて泣くより不機嫌である方が、この人らしい。

三晃化学の廃工場には、まだどこどこに明かりが点いていた。敷地全体をぐるりと取り囲む灰色のコンクリート塀の上に等間隔で細い鉄柱が突き出して、その上にライトが取り付けられているのだ。鉄柱のあいだには鉄条網が巻き付けてあり、侵入者を防いでいる。場内にもいくつか夜間照明がついている。くつきりとしたグリーンの非常灯も見えた。

「何だ、ここは」と、ポロシャツの男性が怒ったような声を出した。「倒産したのかね。物騒だなあ」柴野運転手は確かにこの場所をよく知っているらしく、迷わずにバスを走らせて、元の従業員用駐車場へと向かった。私にもそれとわかったのは、傾いた表示板が見えたからだ。

〈三晃化学社員専用駐車場 無断駐車の場合は警察に通報します〉

白地に赤ペンキ文字の看板は、風雨にさらされて色褪せていた。

「——社員寮だわ」

編集長が、ムスツと閉じていた口を開いて呟いた。元の駐車場、今はただの空き地の右側に、四階建てのビルが立っている。こちらはまったく明かりがない。コンクリート塀のライトに、薄ぼんやりと外郭が浮かび上がり、窓が並んでいるの見えるだけだ。

「どうしてわかります？」と、私は小声で訊いた。

「看板があったの。今は誰も住んでないみたいね」

会社も工場も閉鎖され、社員はみんな去った。今では鼠の巣ねずみになっ
ていることだろう。

頭を少し動かして、私は窓から見える景色を確かめた。人家のものらしい窓明かりが、バスの後方を隔ててかなり遠くに並んでいる。あの感じではアパートかもしれない。こんな時刻に、へしおかぜラインの黄色いバスが、何で廃工場の駐車場なんかにいるんだらうと不審に思う、気の利いた住人がいてくれるといいが。

それ以外の暗闇は、ただの夜か、田圃たんぼか畑か、いずれにしろ何も訝あやつてくれる存在ではなさそうだった。

バスのタイヤが砂利を踏みしめる音がする。バウンドするように揺れる。

「できるだけ扉に近づけて駐めてください」

老人の指示に、ハンドルを取りながら柴野運転手が問い返した。

「どちら側を向きますか」

「バスのドアがある側が、扉に平行になるように付けてください」

老人は言つて、にこりとした。

「あなたの腕ならできますよね」

「びったり付けていいんですか」

「ぎりぎりまでくっつけてください」

老人の意図は明白だった。三晃化学のコンクリート扉で、バスの出入口を塞いでしまうつもりなのだ。

縦列駐車の要領だ。切り返し、少し前に出てまた切り返し、バスの横っ腹にコンクリート扉が近づ

らてくる。

「ストップ」

乗降口がある側の窓の外に、くすんだ灰色のコンクリート壁が迫って、バスは駐まった。

「エンジンを切ってください。ありがとうございます」

両替でもしてもらったみたいなきざいで、しかし本当に感謝しているように聞こえた。

「後ろの席の皆さん」

老人は柴野運転手に拳銃を突きつけて、我々四人に呼びかけた。白髪染めのご婦人、Tシャツの若者、編集長と私だ。

「どうぞ前に出てきて、空いた席に座ってください。私は立ったままでもいいですから、気にしないでください」

真面目なのか冗談なのか。

Tシャツの若者が真っ先に動いて、白いブラウスの女性のすぐ後ろの席に移った。私は編集長を促した。編集長は白髪染めのご婦人に、「一緒に移りましょう」と声をかけた。

白髪染めのご婦人は、また苦勞してステップを下りた。ポロシャツの男性のひとつ前の席に座る。

編集長はTシャツの若者の後ろに座った。

左側の先頭、老人にいちばん近い席が空いた。最初から、私が移るつもりだった席だ。私がそこへ近づいてゆくあいだ、老人は私を見ていた。柴野運転手に向いている銃口が、いつこちらを向くかと、私は身構えた。銃口は動かなかった。

「狭くて申し訳ない」と、老人は言った。

バスの前半分では、席と席の間隔がかなり違っている。最前列の前に機械を格納した部分が飛び出して、左側の方が狭いのだ。さらに右側の方は、車椅子やベビーカーの乗客が乗って来たと

きには座席をたたんでスペースをつくれるように、ゆったりと間隔をとってあった。

「まるで車掌のような言い方ですね」

特に勇気を奮ったわけではなく、思わず、私は老人に話しかけた。

老人もまた、力むことなく返してきた。「そうですね。私を、風変わりな車掌だと思っただけだと有り難い」

「ふざけたことを」

吐き出すように、ポロシャツの男性が言った。今度は手は動かさなかったが、はつきりと表情が変わっていた。怒ると同時に、老人を侮っている。

「何だか知らんが、こんな粋狂に付き合われる身にもなってくれ。じいさん、あんた頭がおかしいわけじゃないんだろ？ いい加減でこんな茶番はやめにしてくれ」

「では、終わりにしましょうか」

言葉と同時に銃口が動き、ポロシャツの男に狙いをつけた。私は首筋の毛が逆立つのを感じた。最初に天井板を撃つてみせたときと同じだ。無造作に、まばたきもせず、老人は引き金を引く。その指に力がこもるのを、私は見たのだ。

ポロシャツの男も、見た。感じた。顔色が変わった。血の気が引く音が聞こえた。

瞬間、私は目をつぶった。

何度思い返しても情けない。私にできたのは、また、ただ目をつぶることだけだった。

発砲音があった。今度もパン！ と乾いた音だった。軽い音だった。何の害もなさそうな音だった。

何かがぱつと舞い上がった。座席の背もたれの詰め物だ。銃弾は、バスの後方の二人掛けの席のひとつ、今は誰も座っていない背もたれに撃ち込まれたのだ。

私が目を開けると、ポロシャツの男も目を開けるところだった。

みんな凍りついていた。動かない。白髪染めのご婦人だけが、ゆっくりまばたきをした。

「あなた」と、ご婦人は老人に言った。一転して目つきが険しくなった。「そんなもの振り回して、危ないじゃありませんか」

どうにも認識が遅い。しかし、ここで声を出して怒るのは私よりもはるかに勇敢だ。

「奥さん」私はできるだけ穏やかに声をかけた。「このご老人も、遊びでこんなことをしているわけではなさそうですから——」

ご婦人は私なんかには目もくれない。真っ直ぐに老人を見据えている。

「わたし、何度かクリニックであなたを見かけたことがありますよ。顔に見覚えがあるんです。わたし、人の顔を覚えるのは得意なんですよ」

老人は骨張った指でしっかりと拳銃を握りしめ、ご婦人の講釈を聞いている。銃口は依然、ポロシヤツの男性に向けたままだ。

「あなた、どこか悪いんですね。重い病気なんでしょう。だからって自棄ヤになっちゃいけません。近ごろはね、お薬も手術の仕方なんかも、本当に進んでるんですよ。ほんの二、三年前には治らなかつた病氣も、立派に治るんです。わたしの母だって、今まで何度も命を落としかけましたけど、そのたびに先生が助けてくださいました。あなた、自棄になつたらいけませんよ」

ご婦人を見つめ返す老人のこけた頬の線が緩んだ。まなざしも和らいだ。

「ご忠告ありがとうございます、奥さん」
あなたはいいい方ですね、と言った。

「柴野さん」

呼ばれて、女性運転手がびくりとした。

「はら」

「運転席を離れてください。あなたにはバスを降りてもらいます」

凍りついて首を縮めたままのポロシャツの男が、目玉だけ動かして柴野運転手を見た。

老人は運転手を降ろすつもりだ。バスを乗っ取ったのは、どこかへ移動するためではない。このバスはここが終点だ。

「後ろへ行って、非常出口を開けてください」

バスの乗降口の反対側、さっきまで編集長が座っていた側の窓は、緊急用の非常ドアになっている。いざというときはシートの座部を持ち上げ、足元のレバーを操作するのだ。

私はこれまで様々な場所で公営バスに乗ってきたけれど、幸いなことに、非常レバーを操作しなくてはならない局面に遭遇したことはない。ただ、それがそこにあることは知っていた。たいていのバスで同じ位置にあり、同じような操作説明書きが貼ってある。

柴野運転手は運転席から動こうとしない。老人の横顔に向かって言った。

「申し訳ありませんが、わたしはこのバスから降りられません」

震えを帯びてはいるが、あの甘やかな声だ。

「この状況で、お客様を置いてわたしだけバスを降りることはできないんです」

老人は横目で彼女の表情を窺った。その気になればいつでも彼女を、あるいはポロシャツの男を撃つことができる位置に立っている。猫背で、ぶかぶかのスーツで。

「会社の規則ですか。違反すると解雇されるのですか」

「そういう問題ではありません。運転手としての責任があるからです」

一瞬、くちびるを固く結ぶと、意を決したように彼女は続けた。「非常ドアは開けます。そこからお客様を降ろしてください。人質はわたし一人で充分でしょう」

「そ、そうだな」

ポロシャツの男が、飛びつくように賛成した。冷汗をかき、目だけきよときよとさせている。

「そりゃ名案だ。そうしよう。じいさん、あんただって人質が大勢じゃ手に余るだろう」

老人が動いた。私と白髪染めのご婦人の前を素早く横切り、ポロシャツの男に迫った。左手で彼の腕をつかむと、右手の拳銃の銃口を彼の顎の下に持っていった。たるんだ肉に食い込むように、ぐいと突きつけた。

「柴野さん、非常ドアを開けてください」

ポロシャツの男はすくみあがった。目玉が上ずり、銃口から逃げようとして首を伸ばす。

「どうぞ、手早くお願いします」

「運転手さん」

黄色いTシャツの若者が声を出した。

「今は言われたとおりにした方がいいです。非常ドアを開けてください」

彼の前で若い女性もうなずいている。

「いい判断です」

にこりともせず、ポロシャツの男にぴたりと寄り添ったまま、老人は言った。

「彼は賢明です。柴野さん、あなたは間違っている。何が充分で何が充分でないかを決めるのは、あなたではなく私なんですよ」

女性運転手の口元がわなないている。

「さあ立って。ああ、その前に、あなたの携帯電話はどこにありますか」

「座席の下の物入れです」

「取り出してください。ゆっくりとね」

前屈みになって物入れを開け、柴野運転手は銀色の携帯電話を取り出した。

「料金箱の上に載せてください。じゃあ、立って運転席から降りてきてください」
立ち上がり、仕切りのバーを上げて、彼女は一段高い運転席から降りてきた。

「皆さん、お静かに。動かないでください」

老人は女性運転手を見つめ、ポロシャツの男の首の肉に銃口を食い込ませて、淡々と言った。「私はこんな年寄りです。皆さんが束になつてかかつてきたら、とてもかかないません。しかし、拳銃というのは便利なものでね。皆さんに取り押さえられる寸前に、一秒の十分の一でもあれば、引き金を引けます。するとこの方は死にます。即死はしなくても、かなり大変なことになるでしょう。この方だけが貧乏くじです。それは気の毒です。とても気の毒です。皆さんもそう思うでしょう？」

「わかつてます」と、Tシャツの若者が言った。「誰もバカな真似はしませんよ」

彼の前で、白いブラウスの若い女性が、ほっそりとした喉をぐくりとさせた。

「そうだ柴野さん、そこにある小銭を持って行きなさい。何かで要ることもあるでしょう」
料金箱の脇の、回数券や一日乗車券を挟んであるポケットに、千円札が数枚入っている。

女性運転手は黙って指示に従った。千円札を胸ポケットに入れ、後方へと通路を歩く。

レバーを操作するにはしゃがみこまねばならず、彼女の姿は完全に我々の視界から消えてしまう。
だが老人に慌てる様子はなかった。

がたん、という音がして、最後部の右側の窓枠が動いた。背もたれの向こうで、柴野運転手が身を起こした。

「開けました」

両手を開いて目の高さ上げた。私のいる場所からでは、本当に非常ドアが開いたのかどうかは見えない。かすかに外気を感じるような気がしたが、錯覚かもしれない。

拳銃を手にした老人は、すぐ前にいる白髪染めのご婦人に、親しげに笑いかけた。

「奥さん、あなたのお名前を教えてください」

ご婦人は眉をひそめ、身を引いた。

「あなたはいいい方です。今日の記念にお名前を教えてください」

「お、教えてください」

首を圧迫されているせいで、ポロシャツの男の声が喉にこもる。

「教えてやってくださいよ、頼むから」

「——迫田です」

「では迫田さん、あなたにはバスを降りていただきます。手荷物を忘れないように。後ろの座席にポ
ストンバッグがありますよね」

「持っていていいんですか」

「かまいません。柴野さん！」

手を上げたまま、女性運転手は「はい」と応じた。

「迫田さんがバスを降ります。こっちに来て手を貸してあげてください」

迫田さんは膝をかばいつつ、背もたれにつかまって立ち上がった。その目が順繰りに我々を見た。

編集長、Tシャツの若者、泣いている若い女性。そして私。

「わたし一人で降りるんですか。ほかの皆さんはどうなるんです？」

「それはあなたが心配することじゃありませんよ、迫田さん」

柴野運転手が戻ってきて、中央のステップの縁に立った。迫田さんに手を差し伸べる。

「まず、バスから降りましょう。お荷物はわたしが上からお渡しします」

狭い通路で身体を入れ替え、迫田さんは非常ドアへと進んでゆく。歩みは見るからにぎこちなく、膝が痛そうだった。柴野運転手が後ろをついてゆく。迫田さんが非常ドアの位置までたどり着くと、

紫色のお洒落染めをした前髪が、外気にふわりと揺れるのが見えた。

「こんな高いところ、降りられないですよ」

迫田さんは非常ドアから後ずさりした。

「飛び降りなきゃならないじゃありませんか。できませんよ」

確かに、非常ドアはタイヤの脇にあり、普通の乗降口よりかなり位置が高い。

「申し訳ないが、降りてください。柴野さん、何とか手伝ってあげてください」

老人が運転手で、柴野運転手が車掌で、不測の事態が起きて非常ドアから乗客を降ろさねばならぬくなり、怖がる年配者をなだめたりすかしたりしている。まるでそんな局面のようだ。

「手伝いましょう」と、私は言った。老人との距離が近くなったので、大きな声を出す必要はなかった。

「余計なこととはしません。約束します。運転手さんは女性ですから、一人じゃ無理ですよ」

老人は私の目を見た。私も老人の目を見た。

「運転手さんは、日ごろ、こういうときのために訓練を受けているはずですよ。柴野さんは大丈夫ですよ」

老人の目が、私の目を覗き込んでそう答えた。冷静な返答であって、それ以上のものではなかった。銃口は依然、ポロシャツの男の顎の下に食い込んでおり、動きはない。

私は軽くうなずき、後方に目をやった。Tシャツの若者も白いブラウスの女性も編集長も、非常ドアの方を見ている。

「迫田さん、いっぺんここに座ってください。そうそう——座って、ゆっくりと下にずり落ちる感じ降りれば怖くないですよ」

柴野運転手は、迫田さんを非常ドアの縁に座らせたらしい。

「駄目ですよ。高いんだもの」

「大丈夫です。やってみてください」

「高いから怖くって」

「じゃ、ちょっと待ってください。そのまま座っていてくださいね」

通路を戻ると、柴野運転手は迫田さんのポストンバッグを抱え上げた。サイズは大きい、さして重そうではない。

「迫田さん、このバッグの中身は何ですか。壊れ物は入っていますか」

「母の着替えです。洗濯物ですよ」

「それじゃ、これを使わせてください。足元に置いてクッションにしましょう」

白いブラウスの女性が、これを聞いてほっと息を吐いた。

Tシャツの若者が、ちらっと彼女を見やった。目が合って、彼の方が先にうなずいた。若い女性もうなずき返した。二人のあいだに、こんな場合でも微笑ましい何かを通った。

「——歳をとるとね」

老人が、彼もまた後部の二人のやりとりをやりながら、呟くように言った。

「若い人には何でもないことが、難しくなるんですよ」

「だったら乗降ドアを開けて、普通に降ろしてあげりゃいいじゃないの」

我らが編集長のご発言だった。相変わらずむっつりとして、眉間に皺を寄せている。グループ広報室内で、誰かのミスを指摘するとき、誰かの提案を「アイデア倒れだ」と退けると、いつも披露するお馴染みの皺だ。

老人は目元だけで笑うと、私を見た。今度はその目に、かすかだが面白がっているような色が見えた。

「あなたの編集長は気難しい方ですね」

私がおか答える前に、バスの後方でどざりと音がした。迫田さんが地面に降りたのだ。

「大丈夫ですか？ 怪我はありませんか」

柴野運転手が大声で呼びかける。返事はないが、女性運転手はすぐにこっちを向いた。

「迫田さんが降りられました！」

こんな状況でも、ひとつのことが上手くいくと、人は元気になれるのだ。柴野運転手の表情は明るかった。

「ほら、大丈夫だったでしょう？」

老人は私に言って、後方に首を伸ばした。

「柴野さん、よく聞いてください」

開け放った非常ドアのすぐ脇で、女性運転手はまた両手を耳の高さに上げた。

「あなたもバスを降りるんです。降りたら、どこかで電話を借りてください。このあたりには交番はありませんし、パトカーの巡回もありません。三晃化学の敷地内には入れませんから、無駄に遠回りしないで、近所の家を訪ねる方が無難です」

「電話を……借りるんですか」

「そうです。だって警察に通報しなくちゃならんでしょう」

私の不機嫌な上司が疑わしげに目を細め、若い男女が目丸くするなかで、老人はてきばきと女性運転手に指示を飛ばした。

「先に会社に電話してもいいですが、そのへんの判断はあなたにお任せします。あとあとのことを考えたら、緊急マニュアルに書いてあるとおりにした方がいいでしょうね」

「——警察に通報していいんですか」

「あなたの立場で、通報しないわけにいかないでしょう。しっかりとしてくださいよ、柴野さん」

老人はいっそ楽しげだった。私の不機嫌な上司は、呆れたように天井を向いた。ついでに、頭の上で組んでいた手を下ろし、ああ疲れたというようにぶらぶら振ってほぐして、また元の姿勢に戻った。これまでも私は、いろいろな局面で、園田編集長の様々な「個性」と対面してきた。付き合にくい個性もあれば、付き合い甲斐のある個性もあった。しかし、これはどっちに評価すればいいのか。剛胆なのか、強がりなのか。現実を甘く見ているのか、現実を呑まれにくいのか。

「あなたの携帯電話をお借りします」

老人は女性運転手に向かって呼びかけた。「ですから、これから私と連絡をとりたい向きには、あなたの携帯電話の番号を教えてください。電池切れになったらそれまでですが」

女性運転手は黙ってその場に立ったままだ。と、手を動かして制帽を脱いだ。

「私は車内に残ります。この帽子を迫田さんに渡して、警察に通報してもらいます。わたしの帽子があれば、証拠になりますからすぐ信じてもらえましょう」

「あなたご自身が通報し、あなたご自身が営業所の偉い人たちと話す方が、はるかに確実です。拳銃を持った男にバスを乗っ取られた。乗客が五人、人質にとられている。場所は三晃化学の脇の空き地だ」と

「でも」

ためらう女性運転手に、声が飛んだ。「行ってください」

Tシャツの若者だ。やはり疲れたのか、彼の肘も下がってしまっているが、声にも表情にも凍りたものがあつた。

「運転手さん、バスを降りて通報してください。その方がいいです」

私も声を出した。「そうしてください。今はそれが、あなたの責任を果たすことだ」

柴野運転手はかぶりを振った。「できません。お客様を置き去りにするわけにはいきません」

「あなたは女性ですよ」若者が言った。「こういう場合、女性から先に解放されるのが筋つてもんです」

「でしたら、そちらの女性のお客様を二人、先にバスから降ろしてください。わたしは職場を離れませんが」

きかん気の子供のように言い募り、柴野運転手はこちらへ戻ってこようとした。すかさず、老人はポロシャツの男をさらに引き寄せ、首筋に銃口を押しつけ直した。ポロシャツの男は不自然に首をねじ曲げられて低く呻き、運転手はつかかかったように足を止めた。

「——わたしも、あなたのお顔に見覚えがあります」

震える声で、運転手は老人に言った。

「何度か、02系統のバスにお乗せしました。わたしたちは輪番で三つのルートを走りますから」老人は答えない。

「ヘクラスト海風」付属のクリニックに通っておられるではありませんか。さつき迫田さんもおっしゃっていましたが、どこかお加減が悪いんですか。だったら、こんなことをしていたらお身体に障ります」

考え直してくださいと、声を振り絞った。

「今なら、まだ間に合います」

車内に沈黙が落ちた。しじまのなかで、我々の鼓動が波動になって空気を震わせたのだろうか。一発目の銃弾で壊された天井板の破片が、今ごろになってひらりと落ちてきた。

「柴野さん、バスを降りてください」

老人の辛抱強い口調に変わりはなかった。「あなたの帰りが遅くなったら、ヨシミちゃんが可哀相

でしよう」

一撃だった。女性運転手は見えない棒にでも叩かれたかのようによろめいた。顔から血の気が引いた。

「どうしてうちの娘の名前を知って」

「私は用意周到な人間なんです」

それだけ言って、老人は柴野運転手から目を切ると、ポロシャツの男に問いかけた。

「あなた、立てますか」

男は目を泳がせ、何とかうなずいた。

「それじゃ、立ちなさい。これからひと仕事してもらいます」

「だったら、銃を何とかしてくれ」

「私は一歩下がりますが、いつでもあなたを撃てますよ」

「わかってるよ」

ポロシャツの男の腕をつかんだまま、老人は几帳面に一歩だけ彼から離れた。男は呻くような声をあげて座席から腰をあげた。

「運転手さんがバスを降りたら、あなた、後ろへ行つて非常ドアを閉めなさい。元通りにきっちり閉めるんですよ」

そのとき、私は老人の新しい表情を目撃した。冷笑だ。それ以外の表現がない。

「あなたがその気になれば、飛び降りて逃げることもできる。あなたが逃げた後、この車内で何が起こるか、誰がどうなるかは、あなたには関係ないことだからね。だが、女性を二人も置き去りにして、尻に帆をかけて一人だけ逃げ出せば、これから先のあなたの人生は、あんまり明るいものじゃなくなるだろうね。それでも、命あつての物だねだと思ふなら、かまわないから逃げなさい。非常ドアは、

あんたより男気のある人に閉めてもらうことにするから」

老人は怒っているのだ。さっき柴野運転手が、自分がバスに残るから乗客を解放してくれと頼んだとき、飛びつくように賛成したこの男を怒っているのだ。

「——逃げやしないよ」

当の本人にも、その怒りは伝わっているらしい。まだ目が泳いではいるが、ポロシャツの男のいかつい顔に生氣が戻ってきた。

「そんなもんで人を脅かして、偉そうに説教しやがって。言っとくが、俺はあんたみたいな老いぼれが怖いわけじゃないよ。こんなところで死ぬわけにはいかないってだけだ」

「その意気です」と、老人は言い返した。

柴野運転手がバスから降り、ポロシャツの男が非常ドアに近づき、片手でシートにつかまりながら宙に腕を伸ばして開いたドアを引き寄せ、けっこう苦労してドアを閉め、さらにしゃがんでシートの後ろに姿を隠し、非常ドアの操作レバーを元通りの位置に戻し、また立ち上がる——一連の行動がすべて終了するまで、私は半信半疑だった。心の半分では、男は開いた非常ドアから地面に飛び降りて、振り返りもせず逃げ出すに決まっていると思っていた。

いや、正確に半信半疑と言っているいかどうかは疑問だ。なぜなら、残った心の半分は、後頭部に押しつけられた銃口の硬い感触を味わうことで手一杯だったからだ。老人は、さっき男にしたように、私に寄り添って腕をつかもうとはしなかった。するりと私の背後に回って、私に拳銃を見せず、ただ銃口の存在を感じさせるだけだった。

私の方が危険だと思つて、逆襲されにくい位置に移動したのか。それとも、私の方があの男よりずっと弱いので、まともに銃口を見せつけたらパニックになると思われたのか。

私と銃口の、両方を同時に見つめる編集長の顔から、ようやくあの不機嫌が消えた。

「杉村さん」と、編集長は言った。囁くような声だった。

「大丈夫ですよ」と、私は言った。「おとなしくしていれば撃たれません」

老人は黙っていた。私も編集長も黙った。私には、夢にも思ったことがない経験だった。笑わず、怒らず、口を尖らせることもなく、かすかに目尻を引き攣らせて押し黙る園田編集長を目の当たりにするとは。

「これでいいのか？」

バスの後方で、作業を終えたポロシャツの男が声を張り上げた。息が荒い。

老人も大声で訊いた。「柴野さんと迫田さんは、まだそこにいますか？」

男は窓から外を覗いた。「いるよ」

「早く行くように言っていてやってください」

ちよつとためらってから、男は平手で窓を叩いた。それからその手で、しっしと追い払うような仕草をした。

「行けよ！ 早く逃げろ！ さっさと一〇番しろってんだよ！」

私の後頭部から銃口の感触が消えた。老人が一步下がったのだ。

「では皆さん、床に座ってください」

若い男女が顔を見合わせ、今度もまた彼が先にうなずいて、座席から降りた。白いブラウスの若い女性は彼に身を寄せ、キュロットスカートの膝を抱えて体育座りをした。Tシャツの男性は正座している。

私はゆっくりと座席を離れ、立て膝をして床に尻をつけた。編集長はまだシートに腰かけたままだ。その膝頭が震えていることに、私は初めて気がついた。

「編集長」

私が声をかけると、編集長はぶるりと身震いし、やおら足をばたつかせて、六センチヒールのパンスを脱ぎ捨てた。そして腰を上げ、私に背中を向け、両手で身体を抱きしめるようにして座り込んだ。

「あなたもこちらへ戻ってください。さっきまでと同じように、両手は頭の後ろで組んで」呼びかけられて、まだ最後列にいたポロシャツの男は、未練がましく非常ドアを一瞥した。やっぱり逃げておけばよかったと、その横顔が白状していた。それを眺める私も、逃げておけばよかったのにバカ正直な人だ——と思っていた。ついさっきは心のなかで、雲を霞と逃げ出すこの男の姿を思い描き、一方的に軽蔑していたのに。

大柄な男は、狭い通路を横歩きで引き返してきて、バスの真ん中の段差まで戻ると、唸り声をあげてそこに腰かけた。

「じいさん、俺は椎間板ヘルニアなんだよ。そんなところに座ったら、十分もしないうちに腰痛が出ちゃう。ここでいいだろ」

「では、下の段に座ってください」

男は素直にステップを一段下がった。ほとんど同時に、車内の照明が消えた。老人が運転席のスイッチを切ったのだ。

真っ暗ではない。コンクリート塀の上に並んでいるライトの明かりが、窓から差し込んでくる。ただ、二年ものあいだ放置され、掃除されていないだろうライトの光は黄色く濁り、淀んでいた。

何のモードであれ、それが切り替わったことを、私は感じた。